

瑠璃色の空

月野 楓



瑠璃色の空が白みがかってくると、やっと空しさから解き放たれる毎日が続いた。不安で胸が苦しくてやりきれなくて、夜の街の灯が消えるまで彷徨い歩いたりもした。すべてを忘れてしまうような睡眠をいつも求めて体を酷使し、目覚めた時に記憶が消えてる事を期待した。でもやっぱり何も変わらなかった。目を覚ますと記憶は甦り、また憂鬱になった。

「誰かが死ななければいけないのよ」

夢はそう言うと、黙り込んだ。周囲の空気は凍りつき、少し動いたりすると割れそうな気さえした。

夢と知り合ったのは、まだ大学に入りたての頃の図書館だった。特に友達もまだ出来ていない僕は、講義の時間が空いていたりするとよく図書館にいたからだ。でも図書館の本を読むわけではなくて、いつも鞆から同じ本を取り出して何度も読んだ。読む度ごとに、違った角度で違った視点で読もうと努力を惜しまなかった。読むに値する本というものは、書き手の意図を最大限に汲み取る読み手側の姿勢によって形を変えて深く心に染みるものだと当時考えていた。なので、安っぽいトリックを散りばめた人気作家は苦手だった。

「その本好きなの？」といつの間にか夢が近くにいた。僕は、首を縦に振った。同じクラスにいる女子であることは知っていたけど、話すのは初めてだった。夢はバッグから大学ノートを取り出すと、それを僕に差し出した。

「読んでもらいたい」

「どうして」

「読めばわかるわ」

まあ、人なんて世の中沢山いるし、こんな子がいたとしてもおかしくはない。初めて話す人に向かってする行動とは到底思えなかったけど、彼女のもう何年も前から僕を知っているような眼差しに圧倒されたとでもいうか、僕はそのノートを受け取った。

「また講義の合間にでもここで」と言い残し、夢は手を振ってから図書館を出て行った。